

実践報告

「わたし ひろがれ！」

——ライフスキルの向上と不登校生への支援に取り組んで——

松原市立松原第七中学校

要約

二〇〇三年度から三年間、文部科学省研究開発学校の指定を受け、不登校の予防と、不登校生への支援の二つをテーマに、研究を重ねてきた。子どもたちのライフスキルの向上をめざす「人間関係学科」の創設、「ほっとスペース」での不登校生支援をすすめるなかで、不登校率が減少しただけでなく、子どもたちも教員も大きく変化し、学校力が向上してきたことを実感している。

一 はじめに——研究開発学校としての取り組み

本校は、二〇〇三年度から三年間、文部科学省から研究開発学校の指定を受け、不登校の予防としての新教科「人間関係学科」の開発と、不登校生の学校復帰をめざした支援に取り組んできた。「総合的な学習の時間」の週一時間（年間三五時間）を「人間関係学科」の時間として位置づけ、ワークショップなどのプログラムを開発

し、子どもたちに提供してきた。一方、不登校生に対しては、校内適応教室とも言える「ほっとスペース」を設置し、別室で支援してきた。

その結果として、二〇〇二年度末には五・五%もあった不登校率が、二〇〇五年度末には、一・八%にまで減少した。不登校の予防としての「人間関係学科」、「ほっとスペース」を拠点とした不登校生への支援に取り組んできた成果である。

二 不登校生への支援―「ほっとスペース」

不登校生への支援として、従来から担任を中心として、クラスの仲間の誘いかけ、家庭訪問や仲間づくりのイベント（ミニボーリング大会、花火をして遊ぶ会、クッキーを作る会等）、保健室や別室での指導など、さまざまな方法で取り組みを進めてきた。そのような取り組みのなかで、学校復帰を果たした子どもたちもいる。しかし、現実には、担任や養護教諭、学年といった限られた範囲での取り組みになっており、学校全体の取り組みにしていくことが課題であった。

不登校生への取り組みについて話し合う会議として、二〇〇三年度、週一回の不登校生等支援会議、月一回の全体会議「こころプロジェクト」を設置した。これらの会議は、不登校生への取り組みにしばった話し合いをする会議であるが、これ以外でも、「不登校は人権課題であり、進路の課題である」という共通認識のもと、学習活動部会、人権・同和教育部会、生徒指導部会の三つの専門部会でも、それぞれの観点から不登校生への支援について話し合うことにした。

さらに、不登校生が学級復帰に至る過程での居場所と

して、不登校生のための部屋Ⅱ「ほっとスペース」を設置し、家庭と学校を結ぶ拠点として位置づけた。

四月の家庭訪問時、不登校状態にある子どもや保護者の不安・悩みを聞き、支援する体制があることを知らせてくることを学校全体で確認している。不登校生や保護者が了解した場合には、担任以外のサポートスタッフも家庭訪問に同行する。不登校生との複数のパイプをつくるねらいだけでなく、保護者に対して、いつも複数のサポートスタッフがいることを伝えたいからである。学校全体での支援体制があることを伝え、不登校生とその保護者のストレスを軽減させたいからである。

《「ほっとスペース」とは》

- ・ 不登校状態で、家にこもりがちな子どもたちが登校した時に学習できる部屋
 - ・ 子どもたち一人ひとりに応じた学習を支援する部屋
 - ・ 引きこもり傾向にある不登校生が、ほっとして学習や体験活動ができる部屋
 - ・ 対象生については、不登校生等支援会議で検討し、本人・保護者と相談する
- 《「ほっとスペース」のあり方》
- ・ 本人の様子と気持ちを第一に
 - ・ 当面、他の子どもたちとの接触は避ける

- ・どんな学習をするかは、本人と相談しながら
- ・子どもたちが選択して取り組めるように、多様な教材を準備しておく

特に、本校が不登校生にかかわる時に大切にしたいことの一つめが、不登校になった原因追究にこだわらないことである。不登校になる理由は、さまざまである。また、不登校になった原因と、不登校が継続する原因は、異なる場合が多い。原因追究は、「犯人さがし」につながることもある。保護者との関係がうまくいかなくなることもある。原因追究にこだわって時間をかけるより、現状を受け入れ、必要な支援について、本人・保護者とともに考え、行動し、できるだけ早くに具体的支援策に取り組むことが必要だと考えたからである。

二つめは、不登校生への支援を、担任まかせ、学年まかせにしないことである。不登校生一人ひとりについて、支援目標を決め、担任・副担任・学年教員・養護教諭・不登校支援担当・生徒指導主事・管理職・スクールカウンセラー（SC）・学生ボランティア（学ボラ）等、全教職員でどんなかかわりをするかを話し合った。校内連携の一例をあげる。

- ・支援目標…生活リズムの確立援助・進路の展望を見つめる

- ・担任…登校を促す・進路情報提供・保護者との連携
- ・副担任…保護者との連絡・学習支援
- ・養護教諭…声かけ
- ・不登校支援担当…ほっとスペースでの学習支援
- ・生徒指導主事…声かけ
- ・SC…アドバイス

- ・学年教員…進路情報の提供・学校見学会等の企画・学習支援体制
- ・学ボラ…ほっとスペースでの学習支援

また、不登校の課題については、校内だけでなく、子ども家庭センター、松原市教育支援センター、松原市不登校児童生徒総合支援会議等との連携も、不登校生等支援会議が中心になってすすめている。

不登校生にかかわるなかで、保護者と話をする機会を多くつくった。そのなかで、一番感じたことは、不登校生の保護者が、想像していた以上に大きな悩みを抱えていたことだ。

我が子が不登校（特に引きこもり傾向の不登校）になったことに対し、「社会に適応できない子どもを育てた親」と自身を責め続けていた保護者もいる。特に、子育ての責任を負わざるを得ない母親の悩みは深い。家族の中でも、親戚の中でも支援がなく、孤立無援の状態で、我が

子をそのまま受け止めようと努力している母親もいる。そんな保護者の心の痛みを聞くにつれ、不登校の課題の重さを感じさせられた。不登校生自身への手だてと同時に、保護者（特に母親）の支援の必要性が高いことが分かった。

そこで、家庭訪問では、子どもの話をするだけではなく、保護者との心のつながりを深めていけるよう心がけることにした。保護者のストレスを少しでも緩和できれば、という願いから、保護者に対してのメールを発信し始めた。

また、子どもが不登校であっても、学校の様子が保護者に伝わるようにするため、学校日よりや学年日より、各種保護者宛てのプリント類は、校内連携のなかで、各家庭に届くよう配慮していった。

これらの取り組みを通して、不登校生の保護者が学校を訪れた際、担任だけでなく、多くの教員が保護者と話ができる状況が生まれてきた。

「ほっとスペース」での具体的な支援は、「学校」に「居場所」をつくることである。そのため、料理に興味のある子どもには、お菓子づくりを、ゲームが好きな子どもには、テレビゲームを活用した。モノを作るのが好きな子どもには、プラモデルの製作を宿題に出したりもした。

無理をせず、まずは大人との関係をつくりながら、本人が、安心して学校で過ごせるようにすること、それが「ほっとスペース」のねらいである。

さらに、登校することができない子どもへの支援も「ほっとスペース」の役割である。「ほっとスペース」は、学校内にある。しかし、本人のいたい場所、本人が安心できる場所が、その子どもにとっての「ほっとスペース」であるとの考えから、自宅から出ることのできない子どもには、自宅を「ほっとスペース」と位置づけ、訪問支援に取り組んだ。家の中で家族とだけ過ごすのではなく、他者との関係をきずく力を育むことが必要だと考えるからである。

1 生徒Aへの支援

Aは毎日昼頃に起き、夜中に寝る生活が続く。ゲームやテレビの画面に向かい、マンガを読み、音楽を聞くなどして一日の大半を過ごす。家から全く外に出ない状況が続く。級友が連絡等を届けても、顔を見せないようになり、徐々に級友との関係も切れていく。限られた友だちとの携帯電話メールでの交流のみで外とつながっている。

週に一回、必ず家庭訪問し、保護者とともに、二時間

程度話をすることにした。趣味の話などをしながら、少しずつ進路のことや不安に思っていることなどの気持ち聞くようにしていった。そのなかで、パソコンに興味をもっていることが分かり、松原市の「こころの窓にアクセス」事業を紹介し、パソコンの無料貸出があること、学校とメール交換ができることを知らせた。すぐに興味をもち、申し込むことになった。学校から毎日のメール送信。返事がくることはなかったが、メールを読んで送った内容に対するAの感想から始まる。

「高校なんか行かない」「じゃまくさい」と言っていたAが、家庭訪問を続けているうちに、「今から行ける高校なんか、ないやんなあ」とつぶやいた。すぐさま進路担当が動く。不登校状態が続いていても、進路が閉ざされているわけではない。さまざまな進路があるのだということを、進路担当が提示し、担任が知らせた。最初は渡されたパンフレットに全く目を通さないAだったが、二学期の終わりごろには、自分でパンフレットを読み、説明に耳を傾け、質問するようになってきた。

進路決定にむけて、写真を撮ったり、書類を書いたり、夜に登校することもできるようになり、通信制高校に合格した。

中学校卒業を前に、担任・副担任・不登校支援担当・管理職と、保護者・本人の話し合いをもった。卒業式への参加を促すためである。本人は最初、参加を拒否していた。しかし、保護者の願いや級友からの励ましのメッセージなど、周りの人の気持ちを受け止め、卒業式に参加し、笑顔で卒業していった。

2 生徒Bへの支援

Bは中学二年生から不登校になる。担任、生徒指導主事、不登校支援担当、管理職、スクールカウンセラーでBのケース会議を持ち、今の状況から脱却するための手だてについて話し合った。毎日朝は起きるものの、ゲームやテレビ、マンガで一日の大半を過ごし、家から全く外に出ていない状況が最大の課題であることを共通認識した。まず家から出ることを目標に、「ほっとスペース」への登校を促すこととし、翌日、家庭訪問し、翌週からの「ほっとスペース」登校を本人と約束することができた。

一方、両親と学校とで、卒業後の進路について話し合いの場を持ち、子ども家庭センターとも連携していくことが確認できた。

ケース会議から四日後、Bの「ほっとスペース」登校

が始まった。みんなより少し遅れて九時過ぎに登校し、三時頃に下校する毎日が続いた。

多様な体験をすること、多くの大人とかかわりを持つことを目標に、「ほっとスペース」でさまざまな「あそび」や工作などを体験した。

登校初日は非常に緊張していたが、徐々に慣れていった。多くの教員が入れ替わり立ち替わり「あそび」の相手をするなかで、少しずつ笑顔で過ごす時間が増えていった。できるだけゆとりと自分の得意なこと、興味のあることを見つける「自分さがし」を目標にしていこうと本人と確認しながら、ゆったりとした時間を過ごした。

三学期になり、中学校卒業後の進路を決定するべき時が近づいてきた。卒業後の話をすると、顔がこわばり、言葉がなくなる状態が続いた。「どう考えたらええのか、分からへん」。独り言のようにつぶやく。働く道は考えていないが、受験には間に合わない、高校には行けないだろうし、どうしたらいいのか分からない。そんななかで悩んでいる姿だった。

「いろいろな見に行ってみる？」と声をかけ、大阪府立子どもライフサポートセンター（ティーンズナビ）と通信制単位制高校を見学に行くことになった。「学校に行つてなかったし、教室に入れなかったけど、自分にも行

けるところがある」という安心感をもてるようになった。そして、保護者と相談し、最終的に通信制単位制高校を受験することに決めた。その後、簡単な数学や国語の問題にチャレンジする意欲も出始め、無事に合格することができた。

3 生徒Cへの支援

Cは、小学校二年生から不登校傾向にあり、中学校の入学式にも参加しなかった。中学一年時には、家庭訪問を繰り返すなかで、月に何回か保健室に登校したが、登校意欲はかなり低かった。Cが二年時に「ほっとスペース」ができ、本人に紹介したところ、「ほっとスペース」に登校するようになった。

「ほっとスペース」での学習は、本人の興味・関心を中心にした調理実習（お菓子づくり）を中心に行った。必要な材料を一緒に買いに行き、道具の名前、使い方がら始めた。作ったお菓子は、職員室に持って行き、他の教員たちに食べてもらう。いっぱいほめてもらうなかで、今までの生活では経験できなかった「あそび」や「調理実習」などの体験を通して、「自分にもできることがある」「くり返しがんばれば上手になれる」「誰にでも得意なこと、苦手なことがあって、何でも完璧にできる人はいな

い」ことが実感でき、少しずつ自分に自信が持てるようになってきた。また、その自信が、さらなる意欲を喚起し、少し難しいことにもチャレンジできるようになってきた。

さらに、家族以外の多くの大人とのかかわりを通して、人間関係をつくることの楽しさや難しさを学び、「私だけ」の世界から、「みんなのなかの私」を意識できるようになってきた。しかし、人間関係をきずく体験の少なから、対人関係がストレスになり、好ましくないストレス反応を起したりすることで、登校がとぎれることもあったが、『ほっとスペース』は、私の「居場所」。『ほっとスペース』に來れば、いろんなことが学べる」との実感が、Cの登校を促していた。

そのなかで、「ほっとスペース」一年目に出会った先輩たちが進路を決定し、卒業していった姿を見ていたため、進路決定は比較的スムーズにすすんでいった。「○先輩は、どこに行ったん?」「わたしも○先輩のとこに行ける?」などと話しながら、自分の進路について考えていった。

保護者に対しても、進路情報を早くから提供し、夏休みには、見学会を実施し、進路希望先を固めた。三学期には、進路が決まったことで安心し、登校する日が減っ

ていくという結果になってしまったが、メール送信や家庭訪問など、卒業まで、関係を切ることなくかかわりをもち続けた。

三 不登校生への支援に取り組んで

不登校生は、一人ひとり状況が異なる。必要な支援も違う。本校では、個に応じた支援をすることで、さまざまな成果をあげることができた。さらに、不登校生一人ひとりに応じた学習支援を行うことにより、学習することや登校すること、さらには進学などの進路に対する意欲を高めることができたと考えている。

また、家族とだけ過ごしていた不登校生が、多様な大人とのふれあいを通して、人間関係づくりを学んできたが、これは、「ほっとスペース」における人間関係学科の実践に他ならない。

多様な大人がかかわるためには、大人の側の共通理解が必要である。この共通理解を深めるのに有効であったのが、不登校生等支援会議である。週一回、不登校生やメンタル面でサポートが必要な子どもについて交流し、支援目標を設定する。それを「こころプロジェクト」等の全体会議で確認する。そのことによって、学校全体で、

不登校生を支援する体制が築かれ、不登校生に多様な大人がかかわるようになってきた。

さらに、「ほっとスペース」での教育課程を、合科的発想での支援へと意識的にすすめたことが、不登校生への柔軟な対応・支援につながっていると考える。

四 「人間関係学科」の開発

1 「人間関係学科」のねらい

「不登校」の課題は、全国的に不登校数が減少したとはいえ、まだまだ憂慮すべき事態である。その背景には、社会の変化にともない、子ども自身のストレスをコントロールする力や人間関係をつくる力が弱くなっていること、将来の展望や学ぶことの意味を見いだしにくくなっていること、経済不況のなかで、家庭崩壊が進んでいること等があげられる。このような状況を受けて、学校は、生徒一人ひとりに対して、「学校での心の居場所づくり」をめざして、さまざまな学びのスタイルや特色と魅力ある学校行事等の工夫・改善を行うとともに、不登校を予防し、不登校生の学校復帰をめざす必要がある。

その課題を克服するため、「自らのストレスに気づき、

ストレスを自己コントロールする力」「自己理解を通して、相手を受け入れ、自己表現しながら温かい人間関係をつくる力」を育てることを目標とする「人間関係学科」を設置することにした。子どもたち一人ひとりの現状を分析し、年間を通じて系統的に実施し、自己認識・共感性・コミュニケーション力・ストレス対処・情動処理等のライフスキルの向上をめざすことで、不登校の予防と改善に役立つと考えたからである。

研究開発一年め。私たちは、子どもたちの実情や課題をつかむことに力を入れた。その結果、ストレス反応が、子どもたちの行動に大きな影響を与えていることに気づき、ストレスへの好ましい対処法を身につけることが急務であると考えた。

そこで、人間関係学科の導入にむけて、まずストレス・マネジメント学習から取り組むことにした。ストレスについて正しく学び、理解することで、ストレスと上手につきあつていく方法が身につくとき、対人関係をきずく力が身につくと考えたからである。

また、子どもたちの実情を分析する一方、子どもたちに身につけさせたい力についても話し合いをもった。世界保健機関（WHO）が一九九三年に提唱したライフスキルが最も子どもたちの課題を明確に表現していると考

え、「人間関係学科」で身につけたい力を、次の一〇のライフスキルとし、それらのライフスキルを身につけるためのプログラムを開発することとしたのである。

- ・自己認識
- ・共感性
- ・対人関係スキル
- ・効果的コミュニケーション
- ・意志決定スキル
- ・問題解決スキル
- ・創造的思考
- ・クリティカル思考（批判的思考）
- ・ストレスへの対処
- ・情動への対処

2 一年目の「人間関係学科」開発

まずは、子どもたちの一番の課題であると考えたストレス・マネジメント学習である。自分のストレスを自覚し、ストレスに関心をもち、ストレスのメカニズムを学習する。その上で、ストレスへの正しい対処法を学んでいくプログラムを作成した。

ストレス・マネジメント学習については、従来から研究がなされている。しかし、私たちは、素人とも言える

教員が、子どもたちと学習できることを一番のポイントにしてプログラムを開発してきた。今までに学習したことのないストレス・マネジメント学習を開発するなかで、逆に教員のストレスは増大していった。それでも、ストレス・マネジメントについて教員自身が学習を積み重ね、子どもたちにわかりやすいよう教材・教具を工夫した。

そして、子どもたちの「ストレスって、ほんやりしたもんやと思ってたけど、誰にでも起こる、あたりまえのことなんやなあ」という声に象徴されるように、ストレスに対する関心が高まり、「ストレスを感じているのは自分だけではない」「ストレスに適切に対処すれば、ストレスは軽減することができる」ことを、子どもたちは実感していった。

一時間の「人間関係学科」の学習が終わるたびに、自分たちの授業をふりかえり、自らの気づきを自覚し、自分や仲間のがんばりを見つけさせる。そして、そんな子どもたちのふりかえりを、次の授業にいかしていく。子どもたちの声に後押しされるようにして新しいプログラムをつくっていく。そんな一年目の「人間関係学科」開発であった。

「人間関係学科」の取り組みを進めるなかで、子ども

たちに学ばせたいことが次々に見えてきた。自分自身の内面を見つめること、周りの人に関心をもち、その人の気持ちに思いをはせること、周りの人との距離のとり方・力の合わせ方、自分の気持ちの伝え方など、さまざまな体験を通じて、子どもたちの実感に訴えるプログラムの開発が急務であることを感じてきた。

また、学年の取り組みとリンクさせたプログラムほど、子どもたちの関心度・学習意欲が高いことも分かった。特に、二年スキー合宿でのクラスミーティング（自分のつまっていること・感じていることなどを、クラス全員が語る夜の集い）とリンクした一連のプログラムは、自分を見つめることの意味・見つけ方に始まり、プレッシャーに負けずみんなに伝えることができた自分への自信につながり、そんな自分の発言を真剣に聞いてくれたクラスの仲間への信頼感へとつながっていくという効果が表れてきた。

子どもたちは、「できない」「しない」のではなく、「知らない」「学んだことがない」ことが多いのだ。だからこそ、体験活動を中心に学習することで、子どもたちの課題を克服することができる！それが、「人間関係学科」に一年間取り組んできた私たちの実感である。そして、この実感が、新たなプログラム開発の原動力となっ

ていったのである。

3 二年目の「人間関係学科」開発

子どもたちの様子は変化するし、課題も変わってくる。学年によって特徴も異なる。そんな子どもたちの状態に応じてプログラムを入れ替えてできるように配慮して作成したのが、パッケージ方式のカリキュラムである。三年間で、一〇項目のライフスキルを網羅したプログラムを学習する。その時々々のターゲットスキルを、パッケージというひとまとまりに整理し、一パッケージを四〜八時間で構成する。そして、一年間で七パッケージのプログラムを実施するようにし、その実施順を子どもたちの現状に応じて変更できるようにしたのである。

さらに、プログラム開発にあたっては、道徳・特別活動・「総合的な学習の時間」とリンクさせることで、「人間関係学科」の取り組みで学習したスキルを、道徳や「総合的な学習の時間」、学年の取り組みでいかすことができ、子どもたちが達成感や満足感をもてるよう配慮した。つまり、「人間関係学科」で学んだスキルを活用し、道徳や「総合的な学習の時間」、学年の取り組みでの学びを、今まで以上に深めることを目標としたのである。

また、プログラムの実施にむけて、私たちは、次のよ

うな点に配慮することにした。

- ・担任・副担任が指導するという固定的な方法ではなく、学年教員全員で指導すること

- ・教員自身の個性をいかした体制をつくること

- ・複数の教員で指導すること

さらに、「人間関係学科」学習後、その時間に学習したことをふりかえり、学びを意識化すること、互いの感じ方の違いを交流することにも、今まで以上に力を入れることにした。

「人間関係学科」の学びが、その学習時間内だけで終わるのではなく、日常の仲間との関係づくりなどにいかせるように、ということを意識して「人間関係学科」のプログラムを開発し、実施することにした。

4 三年目の「人間関係学科」開発

週一時間の「人間関係学科」実施は、かなりハードなものだった。実施にあたっては、指導内容を分かりやすく学習できるよう、教材・教具に工夫をこらしたり、子どもたちの日常をふりかえりながら、あるいはその日の子どもたちの表情を見ながらの授業づくりをしてきた。そして、笑顔で授業にのぞんでいく。そんな苦労と工夫があつて、ようやく実施できた。

さらに、学習したその日のうちに「人間関係学科」学習後のふりかえりや写真を掲示物にまとめ、貼り出していった。かなりの負担増にはなったが、週一回の定期的な学習、その学びが、翌日の掲示板に貼り出されているという取り組みは、子どもたちに安定した効果をもたらした。

子どもたちは、「人間関係学科」の学習を通して、人間関係づくりも学びの対象であることを認識し始めた。自分の気持ちを相手にきちんと伝える方法を学ぶ必要性を実感し始めた。ほとんどの子どもたちが「人間関係学科」を楽しみにしている。

また、三年間の「人間関係学科」プログラム(年三五時間×三年間 計一〇五時間分)を作成し、指導事例集としてまとめあげた。一時間一時間、指導事例をもとに、ターゲットスキルや流れを検討し、必要な教具や準備物を作成してきた。そのなかで、指導事例をバージョンアップさせることも多々あった。指導事例を基本としながらも、その時々の子どもの状況に応じて、臨機応変に対応し、必要なプログラムを提供してきた。

道徳や特別活動・総合的な学習の時間とリンクさせたため、必ずしも毎週同じ曜日に固定して実施することにはこだわらなかった。学年の取り組みの流れに合わせて

「人間関係学科」3年間のカリキュラム

第1学年

	学校行事・生徒会行事	学年のとくみ	人間関係学科の取組
4月	始業式 オリエンテーション 家庭訪問	前期クラス体制づくり 人間関係学科(通年) 前期全体総合開始	【1】自己認識(新しい自分に気づく) (自分の長所・短所を認識する) 『新しい自分に会おう』
5月	授業参観 中間テスト	校外学習	【2】効果的コミュニケーションスキル (言語的・非言語的コミュニケーションを学ぶ) (人の話をよく聞く) 対人関係スキル(共同作業を通して協力しあう) 『新しい仲間との関係を築こう』
6月		「いのち」学習	【3】情動対処(自分・他人の情動に気づく) 『自分をコントロールできる力を身につけよう』
7月	期末テスト		
8月	生徒会主催校区子ども交流会	「涼もう会」	
9月	体育大会		【4】共感性(人に対して寛大になる) 『仲間と協力しよう』
10月	生徒会後期役員選挙 中間テスト	「しんろ」学習 後期クラス体制づくり 後期全体総合開始 校外学習	【5】ストレス対処 (ストレスのメカニズムを知る) (ストレスをコントロールする方法を知る) (自分が変えることのできない状況に対処する) 『ストレスに気づき、ストレスをマネジメントしよう』
11月	校区国際文化フェスタ		【6】対人関係スキル(情報して共同作業を進める) 共感性(攻撃的な対人行動をなくす) 『仲間との関係を築こう』
12月	期末テスト		
1月	生徒会主催校区子ども交流 会「はっと×HOT 会」	「ちがい」発見学習	【7】情動対処(不安・喜怒哀楽の感情をコントロールする) 創造的思考(豊かな発想で自分を表現する) 『豊かな発想をもって、自分をコントロールしよう』
2月			
3月	学年末テスト 卒業式		

第2学年

	学校行事・生徒会行事	学年のとらぐみ	人間関係学科の取組
4月	始業式 初エチューン 家庭訪問	前期クラス体制づくり 人間関係学科(通年) 前期選抜・全体総合開始	【1】 自己認識 (新しい自分に気づく) (自分の長所・短所を認識する) 『新しい自分に出会おう』
5月	授業参観 中間テスト	校外学習	【2】 効果的コミュニケーションスキル (人の話をよく聞く、アサーティブネス) 『コミュニケーション法を学ぼう』
6月		「いのち」学習	【3】 ストレス対処 (アサーティブネス) (困難な状況を扱うための対処法を学ぶ) 対人関係スキル (共同作業を通して協力しあう)
7月	期末テスト		問題解決スキル (集団内で問題を解決する方法を気づく) 『人とのつながりを探る、物事を解決しよう』
8月	生徒会主催校区子ども交流会	「涼もう会」	
9月	体育大会		【4】 意志決定スキル (自分の意志で、自分に適した選択をする)
10月	生徒会後期役員選挙 中間テスト	「しんろ」学習 後期クラス体制づくり 後期選抜・全体総合開始	効果的コミュニケーション (言語的・非言語的コミュニケーション) (人の話をよく聞く) (内気を克服する) ストレス対処 (プレッシャーの下で落ち着きを保つ)
11月	校区国際文化フェスタ	職場体験学習	情動対処 (不安・喜怒哀楽の感情をコントロールする) 『職場体験に必要なスキルを身につけよう』
12月	期末テスト		【5】 共感性 (人に対して寛大になり、他人をケアする) 対人関係スキル (対人関係をつくらせたり、終了したりする) 『仲間との関係、自分のありかたを見つめ直そう』
1月	生徒会主催校区子ども交流会 「ほっと×HOT会」	スキー合宿	【6】 効果的コミュニケーション (内気の克服、人の話をよく聞く) ストレス対処 (プレッシャーの下で落ち着きを保つ) 『スキー合宿クラスミーティング直前』
2月		「ちがれい」学習	ストレスに負けない方法を学ぼう』
3月	学年末テスト 卒業式		【7】 創造的思考 (ポジティブな思考を手に入れる) (豊かな発想で自分を表現する) 『今までの自分の成長を確認しよう』

第3学年

	学校行事・生徒会行事	学年のとくみ	人間関係学科の取組
4月	始業式 朝コンベンション 家庭訪問	前期クラス体制づくり 人間関係学科(通年) 前期選択・全体総合開始	【1】 自己認識 (新しい自分気づく) (自分の長所・短所を認識する) 『新しい自分に会おう』
5月	授業参観 中間テスト	「しんろ」学習 修学旅行	【2】 意志決定スキル (選ぶことの意味を理解し、積極的に意志決定する) 対人関係スキル (共同作業を通して協力しよう) 問題解決スキル (集団的に問題を解決する方法を学ぶ) 『修学旅行前夜、仲間と力を合わせる方法を学ぼう』
6月		「いのち」学習	【3】 対人関係スキル (新しい人間関係を築く方法を学ぶ) 効果的コミュニケーションスキル (内気を克服する) (交流) ストレス対処 (困難な状況を扱うための対処法を学ぶ) 『職業調査にむけて 社会に活用するスキルを身につけよう』
7月	期末テスト	職業調査	
8月	生徒会主催校区子ども交流会「京もう会」		
9月	体育大会	職業調査	【4】 対人関係スキル (信頼して共同作業を進める) 『仲間と力を合わせて共同作業をすすめよう』
10月	生徒会後期役員選挙 中間テスト	「しんろ」学習 後期クラス体制づくり 後期選択・全体総合開始	【5】 共感性 (女だちをつくる) 対人関係スキル (適切な対人行動のための限界を知る) 効果的コミュニケーション (「サティア」私・内気を克服する) ストレス対処 (自分が変えることのできない状況に対処する) 『ステップアップ・マナー』
11月	校区国際文化フェスタ		【6】 創造的思考 (ポジティブな思考を手に入れる) 意志決定スキル (現実的な目標を立て、積極的に意志決定する) 批判的思考 (不平等や不正さ、偏見を認識する) 『最終決定にむけて 構造的な考え方を手に入れよう』
12月	期末テスト		
1月	生徒会主催校区子ども交流会「はっと×HOT会」 学年末テスト	「しんろ」学習	【7】 共感性 (人に対して寛大になり、他人をケアする) ストレス対処 (プレッシャーの下で落ち着きを保つ) 自己認識 (自分をふりかえり、長所・短所を認識する) 創造的思考 (豊かな発想で自分を表現する)
2月		未来にむけて 卒業にむけて	『卒業前夜に 自分の成長を自覚し、仲間との関係をふりかえろう』
3月	卒業式		

柔軟にプログラムを実施し、子どもたちに、自然な学びができるように配慮した。そのことが、一連の流れのなかで、子どもたちが多様なことに気づき、学びを深め、日常活動にいかしていくことにつながったと考えている（『人間関係学科』三年間のカリキュラム…四八〜五〇頁参照）。

5 「人間関係学科」に取り組んでの成果

研究開発をすすめるにあたり、子どもたちの課題について論議を重ねた。その課題発見の一つの手だてとして取り組んだのが、学期ごとに実施する「学校生活調査」である。この「学校生活調査」を分析し、研究の方向性を見いだしてきた。

最初に気づいたのが、子どもたちのストレスへの対処法の課題である。好ましいストレス対処法（積極的コーピング）をとれずに、好ましくないストレス対処法（攻撃的コーピング）をとる結果、周りとの関係も悪くなり、学校生活そのものも楽しくないと答える子どもたちがいることが分かり、子どもたちのストレスに注目して研究を始めた。

「人間関係学科」に取り組むなかで、子どもたちは、

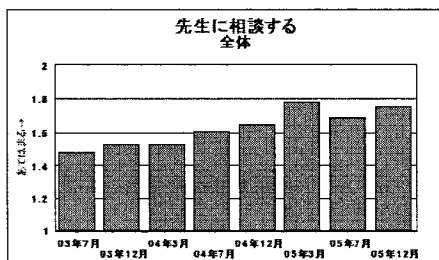
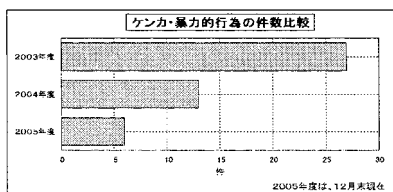
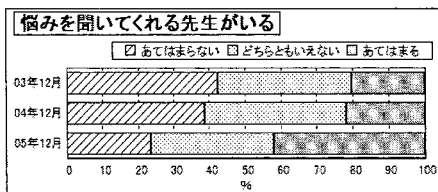
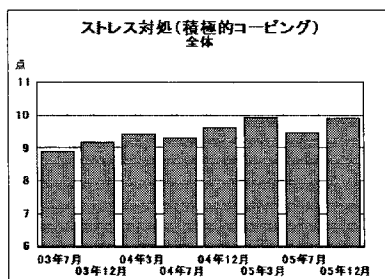
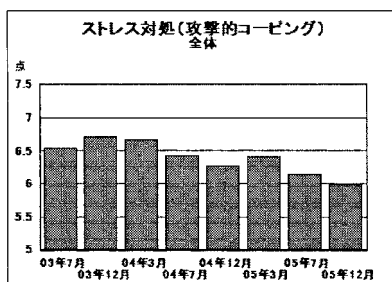
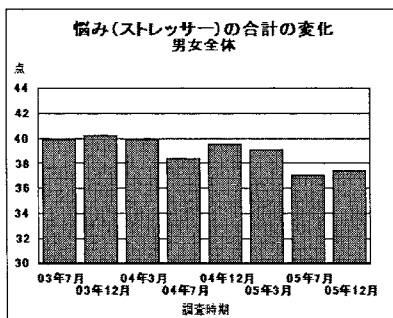
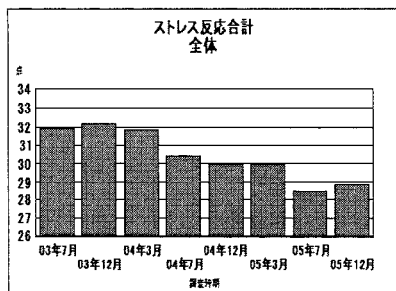
周りとの関係の築き方、自分の気持ちを相手に正しく伝える方法、ストレスをマネジメントする方法を学び、着実に変化してきた。悩み（ストレスサー）そのものも、心身のストレス反応も減少し、学校が楽しいと答える子どもたちが増加してきた。

さらに、積極的コーピングをとる子どもたちが増加し、攻撃的コーピングをとる子どもたちが大きく減少し、ストレスをマネジメントする力がついてきたことを示している。

また、ストレス対処法の一つとして、「先生に相談する方法をとる子どもたちも増加してきており、教員に対する信頼感が高まってきたことも成果の一つである。

「人間関係学科」に対して、子どもたちは楽しく、よく分かる教科であると評価するだけでなく、気づくことの多い授業、考え方が広がる授業として受け止めている。また、「人間関係学科」での学びを、日常の生活にいかそうと努力したと答えている。

さらに、予期せぬ成果として、ケンカや暴力的行為といった問題行動が、この二年間激減してきた。これが、即「人間関係学科」の成果であるとはいえないが、「人間関係学科」が、子どもたちの心の安定に一役買っていると考えている。



《「人間関係学科」を学習して―子どもたちの感想》

- ・ 班の人たちと力を合わせてやるゲームなどもできたので、おもしろかった。
 - ・ 「人間関係学科」は、いろんな場面で、どうすればいいか、よく分かる授業で、楽しかった。
 - ・ 毎日の生活の中で役にたつし、楽しいから、すごくいい授業だと思う！
 - ・ 班でしたワークが楽しかったし、班のみんなのことがよく分かるのが多かった。
 - ・ ストレスのことをいっぱい分かった気がした。班でワークをすると、ストレスを感じたりしたけど、その後、すっかり解消して、とてもためになった。
- 《「人間関係学科」で学んだことを、ふだんの生活にどういかしたか？》
- ・ 人に対しての言葉や言っていること悪いことの区別を考えるようになった。
 - ・ 相手への言葉の伝え方を考えながら話した。
 - ・ ケンカしそうになった時は、アサーションの方法で解決できたりして、その場の雰囲気がよくなった。
 - ・ 意見を聞くって大切なことだと思って思ったから、友だちの意見をよく聞いたら、いろいろ解決できた。
 - ・ ストレスをましにさせることができて、ストレスが

少なくなった。

- ・ ふだんの生活の、いろんな場面で、今まで習ったことを思い出しながら、人と接することができるようになった。

- ・ 近所の人にあいさつするようにした。
- ・ 家の手伝いをするようにした。

というように、自分自身をコントロールしようと努力してみたり、友だちとの関係をつぶさずに自己主張してみたり、「人間関係学科」での学びを、ふだんの生活にいかした子どもたちが多いことが分かる。さらに、それは、子どもどうしの関係にとどまらず、家庭や地域での生活にまで広がりをもっている。

四 学校力の向上

三年間の研究開発で指導いただいた大阪樟蔭女子大学学長の森田洋司教授は、本校の取り組みを、次のように評価してくださっている。

「研究開発の課題として設定された『人間関係学科』と『ほっとスペース』のプロジェクトが、学校の先生方の全員による積極的な参加によって、すべての教育課程を通じて実践され、生徒一人ひとりの豊かな人間性や社

会性、自立性を育成し、総合的な人間力を高めるとともに、不登校を予防し、不登校生徒の学校復帰を促したことは言うまでもない。

子どもたちが変わるためには、まず先生一人ひとりが変わることが必要である。先生が変わったことを子どもたちや保護者や地域の人々が実感することによって学校への信頼感が増し、学校の教育実践への求心力が増してくる。こうした正の循環が、問題の根の部分にある現実のさまざまな負の循環を断ち切り、次のさらなる正の循環を呼ぶ。

研究開発のこの三年間は、学校の「教育力」を高め、保護者や地域の「家庭力」「地域力」を高め、その結果、学校の「学校力」が高まるというプラスのスパイラルを次々と生み出していくことを実感した三年間でもあった」と。

おわりに

以上、三年間の研究の成果を簡単に紹介したが、取り組みをすすめるなかで、当初予想していた以上の効果があることに、大きな驚きを感じている。子どもたちは、こんなにも体験が不足していたのか、こんなにも周りが

見えていなかったのか。子どもたちの課題には気づいていたものの、その背景が見えてきた時、子どもたちでできるだけ多くの体験をさせたいという気持ちが大きくなってきた。体験させるだけではない。私たちは、体験を通して学んだことを意識化させるよう、ふりかえりや分かちあいを大切にして取り組みをすすめてきた。そして、そのなかで、子どもたちにとって、自己肯定感と社会的有用感をバランスよく育むことが大切であること、そのために必要な手だてが見え始めてきた。

しかし、ここに紹介したものは、成果のなかの一側面である。まだまだ分析すべきデータは山積みしている。分析能力もまだまだ未熟である。

今後、さらに子どもたちの現状にせまり、今見え始めてきたものを具体化できるよう研究をすすめ、その成果を発信していきたいと考えている。